

【論文】

『梅光言語文化研究』第2号（2011年）pp. 1・17
@2011年 梅光学院大学国際言語文化学会

日本語では表現されない談話標識 *and*

松尾文子

This paper explores what forms of the discourse marker *and* are not expressed in or translated into Japanese. First, *and* clarifies structures of discourse. It has two types. One function as a signal of addition, continuing the flow of discourse. This *and* often introduces ‘pre-established’ questions and comments by speakers or writers. The other functions as a signal of change, changing the flow of discourse. This *and* changes modes of narration. Second, *and* serves to signal the end of paragraphs or situations concerned.

キーワード：談話標識 *and* 日英語比較 語りのモード

1. はじめに

談話標識 *and* の使われ方を調べてみると、日本語に訳すと不自然で、むしろ日本語では表現しない方が自然な例が見られる。逆に日本語を英語に訳したのを見ると、日本語には相当する表現のない *and* が用いられている例が見られる。何故英語の母語話者は *and* を用いたのだろうか。本論では、英語母語話者と日本語母語話者の *and* 及び日本語での相当表現の使用の有無を考察することによって、特に英語の非母語話者にとって分かりにくい談話標識 *and* の特徴を論じる。資料として、オリジナルが日本語で書かれたものとその英語訳、及び、オリジナルが英語で書かれたものとその日本語訳を用いる。もちろん、著者の文体や好みが反映することがあるだろうが、ここに引用したもの以外でも見受けられた事象で、一般的な傾向と考えて差し支えないと思われる。

2. 談話標識の *and*

接続詞 *and* は本質的には、同種類の要素や文法的特徴を持った項目を対等の関係で並列する機能を持ち、「付加」を表す。*and* が1つの文内で2つ（以上）の要素をつなぐ接続詞の機能を超えて、文と文やさらに大きな単位である文がいくつか集まった談

話と談話をつなぐ機能を持つようになると、andは談話標識となる。文頭で用いられるandは会話分析の用語で言えばturn-initial、あるいはturn-takingのandであるが、その機能はandを談話標識と捉えなければ明らかにできない。このことは書き言葉においても同様である。

談話標識のandは文頭で用いられるが、これに関しては様々な見解がある。文頭で用いるのは不適切、あるいは非文法的であるとされる場合があるが、これはandが本来は1つの文の中で2つの要素をつなぐのに用いるべきで、文の境界を越えるべきではないという考えから来ている。しかしOEDには9～19世紀の実例が挙げられているし、17世紀に発行された欽定訳聖書でもこの用法が見られる。¹ 現在では文法家もこの用法を認めており、標準的な作家もこの用法を採用しているし、*The New York Times* や *The Wall Street Journal* などでも頻繁に見られる。さらに、会話では発話(turn)の出だしでも用いられる(小西(編), p.73; Davidson, p.70; Peters, p.38; Fowler, p.52; Howard, pp.22-23; Partridge⁴, p.27; WDEU)。

談話標識andの主な機能を挙げる。なお、これらの例文ではandは日本語に訳しても不自然ではない。(1)～(4)の日本語訳は本論著者により、下線部はandに相当する表現である。

1. 結果

- (1) She could feel her cheeks burning. “I’m not a criminal. I came here looking for a job.” “And I’m offering you one, my dear.” — *Tomorrow* 彼女は頬が火照るのを自分でも感じる事ができた。「私は犯罪者ではありません。仕事を探しにここに来たのです」「だから仕事を勧めてるんですよ」

2. 対比・逆接

- (2) “I have to make a telephone call to California in a couple of hours. *And* I can’t find a telephone.” — *Gosford* [映画台本] 「2～3時間の内にカリフォルニアに電話しなければならないんです。でも電話が見つかりません」

3. 付加

- (3) “Be careful, okay? *And* stay close.” — *Maid* [映画台本] [子どもに] 「気をつけなさいよ、いい？それから近くにいるのよ」

4. 話題転換

- (4) “She is sweet, isn’t she? *And* how have you been lately, Duchess?” — *Tomorrow* 「彼女、かわいいだろ？ところで、最近ご機嫌いかがですか、公爵夫

人？」

次章から、以下の機能を論じていく。

1. 談話の展開

(1) 付加の合図（談話の流れの継続）：接続詞の原機能を反映 [3章]

(2) 変化の合図（談話の流れの変更）：語りのモードの転換 [4章]

2. 区切りの合図：ひとまとまりの談話の最後の部分を導入 [5章]

3. 談話の展開：付加の合図

3.1 疑問文を従える

先行発話を引き継いで、その内容に関連する疑問文を発することによって談話を展開させる場合、日本語で表現されない and がしばしば用いられる。先行発話に関連する質問を「付加」ということである。また、このような状況で and を用いることによって、そのやり取りが進行中で未完結であることを示す。導入される疑問文は wh 疑問文が多く、先行発話を引き継いで発される疑問文ということで、先行発話と同一、あるいは類似表現が含まれることが多い。さらに、ことばのやり取りの側面から見ると、質問されると当然それに対する答えが発されるので、疑問文自体も談話を展開させる機能を担っている。

ところで、Heritage & Sorjonen は疑問文が and に導かれる場合と and が用いられない場合の違いに関して、次のように述べている。and に導かれる疑問文は、話し手が後続の質問を一連のやり取りの中で ‘routine / agenda / pre-established question’ であると捉えている (pp. 6, 7, 24)。すなわち、話し手が予定していた質問ということである。一方、and が先行しない疑問文は ‘contingent / follow-up question’ で、先行する応答に予期しない、あるいは疑義のある (problematic) 要素が含まれるとする (pp.1, 9)。²

and に導かれる疑問文の実例を検証してみると、‘pre-established question’ とまでは言えないが、会話の流れからすると当然出てくる質問や、談話構造の点からすると先行部分で既出の内容を含む質問である場合がしばしば見られる。

以下の例文では、下線部は先行発話と and に導かれる発話で重複する内容や関連する内容を示す。また、原文が日本語の場合は日本語を先に、英語の場合は英語を先に挙げる。さらに、[△]は日本語で and 相当表現が欠けていることを示す。

- (5) 「ねえワタナベ君、わたしのこと好き?」「もちろん」と僕は答えた。「じゃあ私のおねがいをふたつ聞いてくれる?」「みつつ聞くよ」直子は笑って首を振った。「ふたつでいいのよ。ふたつで十分。ひとつはね、あなたがこうして会いに来てくれたことに対して私はすごく感謝しているんだということをわかってほしいの。…」「また会いにくるよ」と僕は言った。「[△] もうひとつは?」一森

“Tell me, do you like me?” “You know I do.” “Well, then, may I make two requests?” “Three if you like.” Naoko laughed and shook her head. “Two's enough. Two's all I ask. First, I'd like you to realize how much I appreciate you coming here to see me. …” “You can count on me coming again,” I said. “And the other?”

直子は願いが2つあると言い、まず1つ目を述べる。しばらくそれに関する事柄を話し続ける。1つ目の願いの説明が終わったところで話し手（ワタナベ）が2つ目は何かと訊ねるのは当然の流れである。

次例は、物語の主人公と同じ寮で暮らしている突撃隊（Kizuki）との会話である。

- (6) 突撃隊はある国立大学で地理学を専攻していた。「僕はね、ち、ち、地図の勉強をしてるんだよ」と最初に会ったとき、彼は僕にそう言った。「地図が好きな?」と僕は訊いてみた。「うん、大学を出たら国土地理院に入っさ、ち、ち、地図を作るんだ」なるほど世の中にはいろんな希望があり人生の目的があるんだなと僕はあらためて感心した。…「[△] き、君は何を専攻するの?」と彼は訊ねた。「演劇」と僕は答えた。一森

Kamikaze was a geography major at a national university. “I study m-m-maps,” he'd stammered out to me at our first meeting. “You like maps, eh?” I asked. “Uh-huh. When I graduate, I'm going to enter the National Geodetic Institute and make m-m-maps.” Amazing variety of people in this world with all sorts of aspirations and life-goals. … “And what's y-your major?” he asked. “Theater,” I answered.

最初の文で「君の専攻は何?」という主旨の質問があったことが暗示されている。「専

攻」(major) という同一の話題に関して、突撃隊 (Kizuki) はまず自分の専攻のことを述べ、会話の流れとしては当然なことであるが、続けて相手 (僕) の専攻のことを訊ねている。

次例は、主人公の‘僕’と緑の会話である。この部分の直前に、英語の仮定法現在と仮定法過去の違いをきちんと説明できることが日常生活の中で役に立つのか、というやり取りが2人の間でなされた。

- (7) 「僕は君ほど勘が良くないから、ある程度系統的なものの考え方を身につける必要があるんだ。鴉が木のほらにガラスを貯めるみたいに」「[△] そういうのが何か役立つのかしら?」「どうかな」と僕は言った。「まあある種のことはやりやすくなるだろうね」「たとえばどんなことが?」「形而上的思考、数カ国語の習得、たとえば」「[△]それが何かの役に立つのかしら?」「それはその人次第だね。…」—森

“My intuition's not as good as yours, so I'm afraid I need to impose some kind of system on my thinking. Just like a crow might stow bits of glass in the hollow of a tree.” “*And that* comes in handy?” “Who knows?” I admitted. “I guess it makes some things more manageable.” “Like what?” “Metaphysical thought, foreign languages, just to name a couple.” “*And* what are *they* good for?” “That depends on the person.…”

ここでは、「役に立つかどうか」という話題で話が進んでいる。したがって、何らかの事柄が出るたびに、「役に立つかどうか」を問うのは予測できる流れである。先行発話の内容をそれぞれ代名詞 *that*、*they* で受けることで、先行発話とつながりがあることが分かる。

次例は、主人公の‘僕’が友人の緑の入院中の父親の様子を思い出して語る場面である。

- (8) それから僕は緑の父親がわけのわからないことを言ったのを思い出した。「切符? 上野駅?」と緑は言った。…「上野駅……」と言って緑は考えこんだ。「上野駅で思い出せるといえば私が二回家出したことね。… (家に連れて帰る途中で関東大震災・戦争・私が生まれた頃の話などを父親がする) そういう話をボ

ツボツとしてくれるの。福島から上野に戻るあいだ。そして最後にいつもこう
いうの。どこにいったって同じだぞ、ミドリって。そう言われるとね、子供心
にそうなのかなって思ったわよ」「[△]それが上野駅の思い出話？」「そうよ」
と緑は言った。一森

“…” “*And that's your memory of Ueno Station?*” “Guess so,” said Midori.

ここでの話題は「上野駅」である。緑が上野駅で思い出せることを長々と語った後、
話し手である‘僕’は話題となっている「上野駅」に立ち戻って、先行発話全体を
that で受けて談話を展開させている。

次は、話者交替のない例である。ある女性が以前ピアノを女の子に教えた経験を語っ
ている。

- (9) 「私もかなり音楽的な勘はある方だとは思うけど、その子は私以上だったわね。
… 最初はとにかくもう凄いつて思うの。たとえばものすごい難曲を楽譜の初見
でパーッと弾いちゃう人がいるわけよ。それもけっこううまくね。見てる方
は圧倒されちゃうわよね。私なんかとてもかなわないってね。でもそれだけな
のよ。彼らはそこから先には行けないわけ。[△] 何故行けないか？行く努力を
しないからよ。…」一森

“I tend to have fairly good musical intuition, but this girl was even better
than I in that department. … At first they wow you. The kind who dash off
a monster of a difficult piece sight-reading it the first time through. Bowls
you over just to watch. Me, I can hardly keep up. But then that's it, that's
as far as they go. *And why don't they go further?* Because they don't put in
the effort. …”

談話の展開からすると当然出てくる問題提起を、話し手が自らの発話内容に対して行っ
ている。

次例は、‘僕’が友人の緑の自宅に電話をかける場面である。

- (10) [電話で]「申しわけありませんが、緑さんはいらっしゃいますか？」と僕は訊

いた。「いや、緑は今いませんねえ」と相手は言った。「大学に行かれたんでしょうか?」「うん、えーと、病院の方じゃないかなあ。[△] おたくの名前は?」一森

“Excuse me, but would Midori be there?” I inquired. “No, she's out right now,” said the man. “Has she gone to the university?” “Hmm, er … maybe the hospital. *And* your name is?”

電話をかける場合は、まず自分の名前を告げるのが普通であるが‘僕’は名乗っていない。ここでは電話をかけた先の家の娘の緑の動向、しかも緑が大学生であることを知った上での極めてプライベートな質問をしているので、電話を受けた側は相手の名前を知りたくなるのは当然である。

このように、会話の流れからすると生じるのが自然であり予測可能な内容の質問をする前に and が用いられ、この and は日本語では表現されないことが多い。

3.2 先行発話と同一・類似表現を含む

先行発話を引き継いでそのままの方向で展開させることから、and に導かれる部分ではしばしば先行発話と同一、あるいは類似表現を含む。次例では、物語の語り手が同じ寮で暮らす友人のことを語っている。

- (11) 彼はいつも白いシャツと黒いズボンと紺のセーターという格好だった。頭は丸刈りで背が高く、頬骨がはっていた。[△] 学校に行くときはいつも学生服を着た。一森

He was always in white shirt, black slacks, and a navy sweater. Crew-cut, tall, high-cheekboned. *And* he always wore his uniform top to school.

次例では、物語の語り手が同じ寮で暮らすまた別の友人のことを語っている。

- (12) 「あなたは僕がこれまで会った人の中でいちばん変わった人ですね」と僕は言った。「[△] お前は俺がこれまで会った人間の中でいちばんまともな人間だよ」と彼は言った。一森

“Of all the people I've met up to now, you've got to be the biggest oddball,” I said. “And of all the people I've met up to now, you've got to be the most regular.”

ここでは、話し手は相手の発話と全く同じ表現で切り返している。

次例は、療養所のような所で暮らすある女性が主人公に向かって話す場面である。

- (13) 「でもあなたは素直な人よね。私、それ見てればわかるわ。私はここに七年いていろんな人が行ったり来たりするのを見てたからわかるのよ。うまく心を開ける人と開けない人との違いがね。[△] あなたは開ける人よ。正確に言えば、開こうと思えば開ける人よね」 「[△] 開くとどうなるんですか？」—森

“I must say but you are the straightforward type. Me, I can tell that just by looking at you. I've been here seven years and have met all kinds of people. There's a difference between those who can open up and those who can't. And you're one who can. Or, more precisely, you can open up if you've a mind to.” “And what does opening up lead to?”

後者の and では、3. 1 で述べたように、先行発話を受けて疑問文を発することで談話を展開させている。

次例では、主人公の‘僕’とレイコさんが、雨模様の戸外を歩きながら話している。

- (14) 「寒いですね、雨が降ると」と僕はレイコさんに言った。「[△] 雨が降るごとに少しずつ寒くなってね、それがいつか雪に変わるのよ」と彼女は言った。—森

“Cold when it rains, isn't it?” I said to Reiko. “And with each rain it gets colder until finally it snows,” she said.

先行発話の‘僕’のことばを引き継ぐ形で、レイコさんは話を展開させている。

このように、and に続く部分では先行発話と関連した内容が導入され、先行発話と同じ話題で談話が展開することが and によって明示される。

3.3 コメント付加

and で導入される内容に関して言うと、先行発話に対する話し手（書き手）のコメントが導入されることがある。すなわち、and は話し手（書き手）の主観や心的態度の導入の合図となっているのである。次例は、主人公と友人の緑の会話である。

- (15) 「どんなアルバイトしてるの?」「週に三回新宿のレコード屋で夜働いてる。楽な仕事だよ。じっと座って店番してりゃいいんだ」「ふうん」と緑は言った。「[△] 私ね、ワタナベ君ってお金に苦労したことなんか無い人だって思ってたのよ。なんとなく、見かけで」一森

“What kind of part-time job?” “Three nights a week I work at a record shop in Shinjuku. An easy job. All I have to do is sit there and mind the store.” “Hmph,” said Midori. “*And* I'd made you out to be someone who'd never been hard up for money. No special reason, just going on appearances.”

話し手の緑は先行発話に対して‘Hmph’と応答して、さらに and 以下でコメントを付け加えている。hmpf の他に、yes、oh、I see などの応答表現が用いられることもある。

次はコメントを表す部分の組み立て自体が日本語と英語で異なる例である。

- (16) 経済を「実」と「虚」に分ける考え方は、どこかこれまでに述べた「意識と無意識」「脳と身体」「都市と田舎」といった二元論に似ていることに気づかれたかもしれません。[△] その通りで、私の考え方は、簡単に言えば二元論に集約されます。一壁

You must have realized that the division into true economics and empty economics is like other forms of dualism, such as ‘consciousness and unconsciousness’, ‘brain and body’ and ‘city and countryside.’ *And* you are right. Simply speaking, my view is that it all comes down to dualism.

日本語では「その通りで」が英語では“*And you are right.*”と独立した文となって

いて、先行の内容に対する書き手のコメントになっている。おそらくこの文で *and* がなければ、“*you are right.*” の部分が唐突に導入された印象を受けると思われる。

次例では、「わかっているべき現実」とは何なのかという問題提起がなされ、それに対して現実をわかっている人はいないという事実が語られる。続いてそれに関する付随情報や例が提示され、*and* 以下で書き手のコメントが示される。

- (17) もう少し「わかる」ということについて考えを進めていくと、「そもそも現実とは何か」という問題に突き当たってきます。「わかっている」べき対象がどういものなのか、ということです。ところが、誰一人として現実の詳細についてなんかわかっているはいない。[…付随情報や例示…(略)] [△] そこに怖さがあるのです。一壁

If we pursue this idea about ‘understanding’ a bit further, we come up against the issue of ‘reality’, or in other words, what is it that you are claiming to ‘know’ all about? … And that way danger lies.

次例では、「科学は絶対か」ということに関して述べられている。

- (18) 2つ前の章に「科学は絶対的ではない」という主張 / 地球温暖化の例 / 進化論の例 / [△] その時に科学を絶対的なものだという風に盲信すると危ない結果を招く危険性があるのです。一壁

And on those occasions, there could be dangerous consequences if we believe blindly that science is the only thing that counts.

まず、「科学は絶対的ではない」という書き手の主張が述べられ、続いて2つの例が示され、最後に *and* 以下で書き手のコメントが示される。

(16)~(18)で注目すべきは、英語では *and* に導入される部分でそれぞれ、指示表現「その」「そこ」「その」(波線で示している) が用いられていることである。*and* 以下が先行発話を受けたコメントになっているからである。*and* は談話が展開してきて、ここ (*and*) から先は話し手(書き手)のコメントを述べるのだということを知らせる合図となる。

4. 談話の展開：変化の合図（語りのモードの転換）

and の機能といえば、関連する複数の物や事柄を並べる、前件に何かを付け加えるというものがまず思い浮かぶ。しかし、and が談話の流れの転換点になることがある。たとえば、物語を語る際に、セリフ（直接話法）から地の文へ、あるいは地の文からセリフ（直接話法）へと転換する時に and が用いられる。まず、直接話法から地の文への転換の例を挙げる。

- (19) 「よくわからないわ、いいのよ」[△] それが会話の終わりだった。直子は再び東に向かって歩きはじめ、僕はそのうしろを歩いた。一森

“Oh, I don't know. It's nothing.” *And* that was the end of the conversation. Naoko strode off east again, with me close behind.”

次は、地の文から直接話法に転換される例である。

- (20) しかし二日目の朝になると彼はむっくりと起きあがり、何事もなかったように体操を始めた。体温を測ってみると三十六度二分だった。人間とは思えなかった。「[△]おかしいなあ、これまで熱なんか出したこと一度もなかったんだけどな」と突撃隊はそれがまるで僕の過失であるような言い方をした。一森

Then, on the morning of the second day, he sprang up and began doing his exercises as if nothing had happened. When I took his temperature, the thermometer read just over 97. The guy couldn't have been human. “*And* to think I haven't once had a fever before!” said Kamikaze, almost as if it had been through some oversight of mine.

次は、地の文から自由間接話法に転換される例である。

- (21) Nora suspected many would secretly over their cruise. And in three months who'd care anyway? — *Christmas*

しかし、この（反対派に属する後者の）グループのなかにも、心ひそかにクルー

ズ旅行を羨む者はすくなくないだろう、とノーラは思った。[△] 第一、三か月もすればみんな忘れてしまうに決まっている。

英語では前文で Nora に関する記述がされ、and によって語順は直接話法を保持し時制のみが間接話法的になっている自由間接話法が導入される。自由間接話法では Nora の思考が表されている。なお、談話標識の anyway は直接話法の要素である。

次も同様の例である。

(22) They drove along avenues heavy with motor traffic and forlorn pedestrians hurrying along the frozen streets. The city seemed overlaid with a dull, gray patina. And it isn't just the weather, Dana thought.—*Sky*

車は走りだした。道は行き交う車で込んでいた。歩行者は少なく、凍てつく道を肩をすぼめて早足で歩いていた。街を形づくっているのは、白い雪以外は、灰色の重苦しい建造物だけである。[△] 〈これは決して景色だけじゃないわ〉ダナの実感だった。

間接話法ならば “Dana thought that it wasn't just the weather.” とするべきところを、時制は直接話法の要素を残し、伝達部も直接話法的に付加されている自由間接話法の一つである。³ 前文では街の描写がされていて、and を合図にダナの思考が導入されている。

また、and が話法転換の合図となることがある。次例では、and によって直接話法から自由間接話法への転換が示されている。

(23) “Take a cruise,” Yank mumbled. “Can't think of anything worse. Socked away on a boat with Abigail for ten days. I'd pitch her overboard.” And no one would blame you, Luther thought.—*Christmas*

「クルーズ旅行に出ろ、か」ヤンクはぼそりつつぶやいた。「それ以上の悲惨な事態は想像もつかないな。十日間もアビゲイルとおなじ船に閉じこめられるなんて。そんな目にあったら、女房を手すりから海に突き飛ばしちまいそうだ」[△] そうなっても、だれもきみを責めたりするものか—ルーサーは思った。

間接話法ならば “Luther thought that no one would blame him.” とするべきところを、ダイクシスは直接話法の要素を残し、伝達部も直接話法的に付加されている自由間接話法の一つである。前文の直接話法から and を合図に話法の転換が行われ、Luther の思考が導入されている。

次の2例は、and によって直接話法から自由間接話法への転換が示される例である。

- (24) “Would you like to have a nightcap at my apartment?” … “Thank you, Tim. But no.” “Oh.” His disappointment was obvious. “Maybe tomorrow?” “I'd love to, but I have to be ready early in the morning.” And I'm madly in love with someone else.—*Sky* 「ぼくのアパートに寄って一杯やっていますか?」 … 「ありがとう、ティム。でもお断りするわ」「やっぱりだめですか?」彼は失望を隠そうとしなかった。「じゃ、もしかしたら明日はどうですか?」「明日は朝早くからいろんな準備があるの」[△]〈それよりも、わたしの心はある人に捧げたままなのよ〉

- (25) “She has no one, darling. She's all alone and panicky. She won't have anyone else here. I honestly don't know what Rachel would do if I left.” And I don't know what I'm going to do if you stay.—*Sky*

「彼女には誰もいないんだ。天涯孤独のうえに、こんな病気になってパニックになっている。おれ以外にすぎる相手はいないんだ。もしおれが見捨てたら、彼女は何しでかすか分からない。それが正直なところだ」[△]〈あなたが戻らなかったら、わたしだってどうなるか分からないわ〉]

いずれも前文の直接話法から and を合図に話法が転換され、伝達部のない直接話法の自由直接話法で登場人物の思考が表されている。

このように、セリフ（直接話法）から地の文へ、地の文からセリフ（直接話法）へ、あるいは話法の転換といった語りのモードの転換を行う時に and が用いられる。それは、and は「attention marker としての機能を持ち、聞き手に‘これから談話の方向が変わる’という事実に注目させる。次の話題の方向が変わることを予告し、同時に discourse oil の機能を果たす」(Fraser: 896) ことによる。一方日本語では、話法において視点を自由に移動させることが可能で、語りの地の文に突然登場人物の思考が

入り込むことがある。また、話法の種類の区別も曖昧である。したがって、話法や語りのモードの転換を言語的に明示することはない。ただし、(4)のように話題を転換する場合には、andの相当表現の「ところで、さて」などが用いられる。

5. 区切りの合図：ひとまとまりの談話の最後の部分を導入

接続詞 and によって複数の要素が列挙される場合、通例最後の要素の前に and が置かれる。このことが談話標識の and の用法に反映されて、パラグラフや1つの場面の最後の文や発話が and によって導入される。次例では、語りが情景描写から人物描写に移行し、and 以下の文でパラグラフ、及び、1つの場面が終わる。

- (26) 十八年という歳月が過ぎ去ってしまった今でも、僕はあの草原の風景をはっきりと思い出すことができる。… (情景描写) … [△] 歩きながら直子は僕に井戸の話をしてくれた。一森

Even now, eighteen years later, I can still picture the meadow with amazing clarity. … *And* as we walked, Naoko told me about a well.

次例では、短い談話の間でセリフ（直接話法）、準直接話法（中間話法）、地の文と展開しており、and に導かれる最後の部分で一つの場面を終えている。

- (27) 「今度の日曜日、ダブル・デートしないか？俺の彼女が女子校なんだけど、可愛い女の子つれてくるからさ」と知りあってすぐにキズキが言った。いいよ、と僕は言った。[△] そのようにして僕と直子は出会ったのだ。一森

First thing after we met, Kizuki had asked me, “What say we go on a double date this Sunday? My girl goes to a girls’ school and she’ll bring along something cute.” Sure, I told him. *And* so I met Naoko.

次は一連の語りの最後の部分の例である。

- (28) 我々二人で東京の町をあてもなく歩きつづけた。坂を上り、川を渡り、線路を越え、どこまでも歩きつづけた。どこに行きたいという目的など何もなかつ

た。ただ歩けばよかったのだ。まるで魂を癒すための宗教儀式みたいに、我々はわきめもふらず歩いた。[△] 雨が降れば傘をさして歩いた。—森

We wandered aimlessly all over Tokyo—up hills, across streams, over train tracks, everywhere. No particular direction, just walking for the sake of it. Relentless as some healing spiritual rite. *And* if it rained, we'd open our umbrellas and keep walking.

2人のある日の行動が述べられ、andに導かれる文で一連の記述を終えている。

このように、列挙されている文や発話のタイプが何であれ、パラグラフや1つの場面の終了部分でandが用いられる。

6. おわりに

以上、日本語では表現されない英語の談話標識 andの機能を見てきた。まず、談話の流れをそのまま継続して先行発話を引き継いで疑問発話や疑問文が用いられ、先行発話の内容に対するコメントが付加されるときに、英語ではandが用いられる。この場合、andに導入される部分では、先行発話と同一、あるいは類似の表現や先行発話の内容を指示する代名詞が用いられることが多い。また、andに導かれる疑問文は、会話の流れや談話の構造からすると予測可能な‘pre-established’的なものが多い。このようなandを日本語で表現することは可能であろうが、談話の流れが滑らかでなくなったり、ことば使いが冗漫な印象になる。

次に、談話の流れを変更して語りのモードを転換するさいに、英語ではandが用いられる。これには話法の転換が大きく関るが、日本語では話法のタイプの区別自体が曖昧で、一連の語りの中でモードの転換を言語的に明示することは少ない。一方英語では、それがandによって明示される。

最後に、パラグラフや一連の場面の最後の部分でandが用いられるが、これは接続詞andが複数（3つ以上）の項目を並べるときに、最後の項目の前でandを用いる用法を反映している。何らかの一まとまりの最後を英語ではandで示すことがあるが、日本語では言語的に明示することが少ない。

andは相当する日本語「そして、それで、で」などと比べると、記号化されていると考えられる。ただし単なる記号ではなく、談話構成上重要な合図としての機能を持つ記号になっている。今後、談話標識の用いられ方、具体的には日英語でそれぞれど

のように訳される（表現される）か、また表現自体がされるのかされないのかを、さらに広範囲に検討することで、英語と日本語の談話構成の差異、何を言語化し何を言語化しないのかが明らかになると考える。

注

- 1 Gospel of St. John, 21:21 に実例がある (Davidson, p.70)。また、清水 (pp.53-54) によると、欽定訳聖書の改訂版で 19 世紀に発行された改定聖書でも欽定訳聖書でも、and という copula が極めて多く用いられる。さらに、パラグラフや章の書き出しが and で始まることが非常に多い。
- 2 and が疑問文の前で用いられることは日常会話ではまれだが、法廷や医療現場などの ‘institutional settings’ (参加者の役割が限られており明確である) で見られるやり取りの一般的な特徴であるとする (p.1)。しかしながら、日常会話では疑問文の前に and を用いる例は決して少なくはない。
- 3 自由間接話法は本来は伝達部を持たないが、この話法は直接話法と間接話法の中間的なもので、バリエーションが多い。したがって、(22)(23)を自由間接話法の一つと見なすことにする。

参考文献

- Biber, D., S. Johanson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Davidson, M. 2006. *Right, Wrong, and Risky: A Dictionary of Today's American English Usage*. New York: W. W. Norton & Company.
- Dorgeloh, H. 2004. “Conjunction in sentence and discourse: sentence-initial *and* and discourse structure.” *Journal of Pragmatics*. 36(10), 1761-1779.
- Fowler, H. W. 1996. *The New Fowler's Modern English Usage*. Revised by R. W. Burchfield. Oxford: Clarendon Press.
- Fraser, B. 2009. “Topic Orientation Markers.” *Journal of Pragmatics*. 41, 892-898.
- Heritage, J. and M-L. Sorjonen. 1994. “Constituting and maintaining activities across sequences: *And*-prefacing as a feature of question design.” *Language in Society*. 23, 1-29.
- Howard, G. 1993. *The Good English Guide: English Usage in the 1900s*. London: Macmillan.

- 小西友七(編). 2006. 『現代英語語法辞典』 東京: 三省堂.
- 松尾文子. 1996. 「英語と日本語の話法」『英米文学研究』 32, 113-130. 梅光女学院大学英米文学会.
- 一. 1997. 「英語の自由間接話法と日本語の中間話法」『英語表現研究』 14, 49-57. 日本英語表現学会.
- 一. 2010. 「談話構成と表現法の日英語比較: 談話標識 now と and を例に」『梅光言語文化研究』 1, 5-23. 梅光学院大学国際言語文化学会.
- Peters, P. 2004. *The Cambridge Guide to English Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Partridge, E. 1990⁴. *Origins: An Etymological Dictionary of Modern English*. London: Routledge.
- Schiffrin, D. 1986. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 清水護. 2007. 『英語聖書の語学・文学・文化的研究』 東京: 学術出版会.
- Webster's Dictionary of English Usage*. 1989. Springfield: Merriam.

引用作品 ([]内は本文中の略号を示す)

- Grisham, J. *Skipping Christmas*. 2001. Dell Books. [*Christmas*]
- Murakami, H. *Norwegian Wood I, II*. 1989. Translated by Birnbaum, A. Kodansha English Library.
- Sheldon, S. *If Tomorrow Comes*. 1985. Pan Books. [*Tomorrow*]
- 一. *The Sky Is Falling*. 2001. Warner Books. [*Sky*]
- Yoro, T. *The Wall of Fools*. 2005. Translated by Toyozaki, Y. and S. Varnam-Atkin. アイビーシーパブリッシング.

Gosford Park. 2002. 株式会社スクリーンプレイ [映画台本] [*Gosford*]

- グリシャム, ジョン. 『スキッピング・クリスマス』 (白石朗訳) 2005. 小学館.
- 村上春樹. 『ノルウェイの森 上・下』 1987. 講談社. [森]
- 養老孟. 『バカの壁』 2003. 新潮社. [壁]